

「日本刀剣を学ぼう」

～鑑賞のツボと技術研修<研磨>見学～

2016年8月30日実施 JGA 第一支部研修 終了報告

第一支部運営委員会主催の「日本刀剣」研修が“鑑賞のツボと技術研修<研磨>見学”というテーマで8月30日(火)に代々木の刀剣博物館(石黒派展開催中)で開催されました。日本刀剣の原料である和鉄を製造する技術は弥生時代まで遡り、3世紀の古墳時代には既にあったとされており、平安時代中期以降に大陸から伝搬された鍛錬の技術と相まって、鉄に対する新技法が編み出された結果、日本刀の原形である直刀が誕生することとなりました。研修に参加された方は日本刀剣がいかにか古い歴史を持っているか、また単なる武器ではないその美術品としての価値を改めて認識されたようです。

参加人数は15名(正会員13名、非会員1名、運営委員1名)で、東京、神奈川、千葉、埼玉と首都圏からの参加者が殆どでしたが、京都から遥々夜行バスで参加された方もいらっしゃいました。また、日本刀に対する知識を、これを機に深めたいとおっしゃる方は7名いらっしゃいました。

研修は三部構成で、第一部(13:00~13:30)は基礎知識編で橋本運営委員による日本刀剣の製造工程の説明、第二部(13:30~14:15)は、2階の博物館展示室で日本刀剣の歴史とその時代毎の特徴、各部の名称とそれにつわる日常用語(鑢迫り合い、切羽詰まる、錆を削る等)や鑑賞のツボである波紋の鑑賞方法について、更に今開催中の「花鳥絢爛 刀装 石黒派の世界」の特徴について講義して頂きました(講師は公益財団法人日本美術刀剣保存協会 学芸部 たたら・伝統文化推進課の小菅太一氏)。その後フリータイムを設け、各自観賞したり、小菅講師に質問されたりと、皆さん熱心でした。

第三部(14:50~15:20)は4階の技術研修会場にて、同学芸部 たたら・伝統文化推進課 課長の黒滝哲哉氏より、刀剣の原料となる玉鋼(たまはがね)を作る炉である「たたら」の原理(炉の中でどういう状態になっているのかがいまだに謎)、砂鉄と木炭が刀剣に化ける不思議さ、更に日本刀の歴史について講義がございました。特に、日本刀を明の時代から大量に輸出しているにも拘らず、殆ど残っていないのは、中華鍋に化けたからだのご説明には全員が爆笑でした。



次いで、当財団法人が技術継承のために毎年実施している技術研修の様子を見学させていただきました。今回は研磨で、各自、講師の**研師(とぎし)**の方や研修生に熱心に質問したり話を伺ったりし、講師や研修生の方も親切に教えてくださいました。研修生の中には、ロシア人とイギリス人の方もいらっしゃり、日本刀剣が海外でも人気があることを改めて知ることが出来ました。中でもロシアでは人気上昇中だそうです。

16:00まで各自見学をし、当博物館のアンケートを回収し、最後にお互い挨拶をしながら解散となり「日本刀剣」研修を無事終了しました。尚、博物館内と研磨研修会場は撮影禁止でした。